

# ポローニア

## paulownia



3 B 奥村 りな



校内産日本綿花によるコースター製作：「服飾文化」（左上）、  
ライントレースカーと桐の入り置物製作：「工学情報実習」（右上）、  
本校の人気者：生物資源実習（左下）（附属坂戸高校）



### 目次

#### 教育長挨拶

巻頭言「伝統と革新」◆茂呂雄二	2	手作りの交流を重ねて◆石井裕志	5
「共生社会を目指すスポーツ交流と シンポジウムの集い」を開催◆雷坂浩之	2	附属小学校での教育実習◆山本良和	6
創立60周年を迎えた附属桐が丘特別支援学校 ◆西垣昌欣	3	平成30年度教育実習を実施◆濱田 淳	6
第45回 聴覚障害教育担当教員講習会の開催 ◆橋本時浩	3	中学生が語る「深い学び」～研究協議会全体会にて～ ◆関谷文宏	6
駒場の体育祭◆横尾智治	4	附属高校2学年シンガポール修学旅行◆松下朝子	7
「認められる経験」が支える主体性～大塚祭～◆中村 晋	4	第4回全国SGH校生徒成果発表会・第7回高校生 国際ESDシンポジウムを開催◆建元喜寿	7
運動会～紅組、白組、青組に分かれて～◆竹崎信也	5	朝永振一郎記念 第13回「科学の芽」賞 表彰式・ 発表会開催◆濱本悟志	8



# 伝統と革新

附属学校教育局 教育長 茂呂雄二



YUJI  
MORO

筑波大学の附属11校は長短の差はあれ、いずれも長い歴史と伝統を有する学校ばかりです。伝統は学校の深い経験を意味し児童生徒の学びを後押しし、伝統がもたらすさまざまな資本の恩恵も大きな物があります。しかし、一方で、伝統は制約や拘束も意味して、新しいチャレンジを許さない軀にも成りかねません。

むかし、人々の復元の活動をテーマに研究していた時期がありました。新聞には、ときどき、長年絶えていた祭りや工芸技術が復活したというニュースが踊ります。復元とはどういう人々やマテリアルのネットワークで可能になるのかを明らかにしようと、伝統の復活や伝統の継承の場面で活動する職人や実践家を追ったことがありました。じつは伝統を維持する人も、伝統を復活する人々も、昔通りのものや事柄をそのまま回復してるわけではありませんでした。環境も人々も、マテリアルな背景も変化するわけですから、そこには必ず新しい活動が生まれているのです。復元や伝統の継承は、むしろ新しい活動をどのように生み出すかという意味で、活動の形を刷新する学習活動なのだ、というのがささやかな結論でした。

附属学校群が、これからどのような新しい活動を生み出すか、それによってどのように伝統を繋いで行くのか楽しみです。

シンポジウムでの発表



## 「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催

附属学校教育局 共生シンポジウム実行委員長 雷坂浩之

平成30年12月9日、筑波大学附属中・高等学校の桐陰会館と体育館において、附属学校教育局主催による「共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い」を開催しました。この集いは本年で3回目となりますが、本学附属11校の児童生徒や教員だけでなく、保護者や一般の参加者を合わせて約300名の参加者がありました。

第1部では、附属桐が丘特別支援学校の卒業生で、ロンドンパラリンピック、ボッチャ日本代表の秋元妙美氏をお迎えし、「いろいろな人と共に生きるということ」というテーマでご講演をいただきました。アシスタントである弟さんと一緒に挑んだロンドンパラリンピックの際の映像の紹介や「(体が不自由でも) 私もみんなの一員」、「サポートを受けて自分がやりたいことを実現することが大事」、「味方がいると強くなれる、あなたも誰かの味方になって欲しい」といったメッセージには、参加者一同大きな感動をいただきました。

講演 秋元妙美氏



第2部はシンポジウムとなり、『黒姫高原共同生活が与えてくれたもの ~最初は「はじめまして」から、いつの間にか「また会ったね」の関係に~』と題して、生徒自らの司会で、3日間の共同生活の様子を映像で紹介した後、自分たちが参加した共同生活で体験したこと、感じ取ったこと、これからの共生社会を目指しての抱負などを児童生徒が発表しました。

第3部では、パラリンピック種目の一つである「ボッチャ」と附属坂戸高等学校の生徒たちが開発したアダブテッドスポーツ「キックリン」の体験を通して、障害の種類や有無に関係なく、年齢の幅を超え、スポーツを楽しみながら交流を深めることが出来ました。

参加者は、互いの個性を尊重し合いながら、これからの共生社会を目指すための課題を考える良い機会となりました。

キックリン



講演に聴き入る参加者





## 創立60周年を迎えた 附属桐が丘特別支援学校

附属桐が丘特別支援学校 副校長 西垣昌欣

平成30年11月17日(土)に、附属桐が丘特別支援学校の本校体育館で、創立60周年記念式典が行われました。当校は、昭和33(1958)年4月に、東京教育大学教育学部附属養護学校(当時)として誕生し、今日まで肢体不自由教育の発展に寄与するための学校として60年の歴史を歩んできました。その節目を記念して、在校生と教職員に加え、多くの来賓や旧職員、卒業生にもお集まりいただき、総勢300名ほどで創立60周年を祝いました。

式典は2部構成で行われ、第1部は、本学副学長(附属学校教育局教育長)の茂呂雄二先生をはじめ、文部科学省や関係機関の方々からご祝辞を賜るなど、厳かに進められました。第2部は、「この十年を振り返り、次の十年に繋ぐ会」と銘打ちまして、児童生徒の代表が司会・進行を務め、学校の沿革を紹介したり、学校に関するアンケート調査の結果を報告したりしました。メインには、元校長の安藤隆男先生(本学・人間系教授)、前校長の川間健之介先生(同前)、そして卒業生2名を加えた4名が、在校生の質問に答える形で対談が

行われ、それぞれの方から在校生に向けてアドバイスやエールが送られました。最後に校歌を皆で斉唱し、式典は無事閉式いたしました。

本式典を通じて、多くの方から寄せられる当校への期待の大きさをあらためて感じるとともに、次の10年、そしてもっと先を見据えて、これからも肢体不自由教育ひいては特別支援教育の発展に寄与していく学校であり続けたいとの思いを強くいたしました。



## 第45回 聴覚障害教育担当教員講習会の開催

附属聴覚特別支援学校 主幹教諭 橋本時浩

平成30年11月14日(水)から16日(金)の3日間、筑波大学附属聴覚特別支援学校を会場に、「第45回聴覚障害教育担当教員講習会」を開催した。本講習会は文部科学省が公募する「特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業」に応募し採択を受けて実施されたものであり、主催は文部科学省と筑波大学である。

講習会開催にあたり、47都道府県20政令指定都市の教育委員会と2校の私立学校(聴覚障害)に案内を発送し、34の都道府県と政令指定都市から49名の申し込みがあった。各自治体や学校は、現場での経験が豊富な教師を選抜して参加させるため、その意欲や期待に応えられるような、講演や講義内容の精選と指定授業者の決定を行う。

今年度の講習会のテーマは「特別支援学校や難聴学級に在籍する聴覚障害児の課題と指導の在り方～高等部段階の生徒に焦点を当てて～」に設定し、理論と実践の2つの側面から、聴覚障害教育(高等部)における今日的な指導の在り方について課題を共有し方法を探った。

社会が合理的配慮の意識を高めるなか、聴覚障害生徒の高等教育機関への進学も増加の傾向にある。授業研究会では、次の教育機関や社会への橋渡しを担う高等部ならではの白熱したやり取りが展開され、充実した講習会となった。







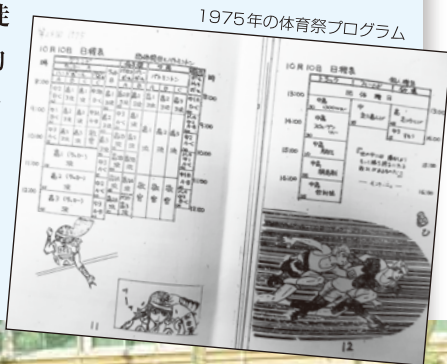
## 駒場の体育祭

保健体育科・体育行事係  
横尾智治

学生をたくく色紙伝

駒場の体育祭は今年度で71回を迎えました。以前、学校の資料室を整理した時に昔の体育祭のプログラムができました。過去の様子を想像しながらみると、砲丸投げ種目があったり、相撲の土俵の場所が違ったり、今と違う部分が多くみられました。昭和43年の体育祭実行委員会委員長は次のように記しています。「体育祭、それは昨年度から大きく変革された体育祭、真のスポーツの祭典としての体育祭である。通常のその場限りの運動会は、もはやかなりの点で、その魅力を感じなくなった。私たちは、新しい形態の体育祭、いわゆる“オリンピック形式”を考え出したのである。全校生徒が各チームに所属し、その種目の練習を通じて、相互の連帯を深め、真のスポーツの喜びを知ろうではないか。」現在まで続く駒場のオリンピック形式(多くの種目を校内各所で同時並行で実施)は1964年東京オリンピックの3年後に誕生したようです。

資料を読むと体育祭実行委員会の企画運営の奮闘、苦悩の跡が読み取れました。オリンピック形式を続けることによりマンネリ化し惰性的だと捉えられた時期もあったようです。しかし、その時その時の生徒たちが工夫し生徒の多くが楽しめる体育祭を創りあげて現在に至っているようでした。2020年再び東京オリンピックが開催されます。生徒たちは何を感じ、駒場の体育祭に何を取り入れるのか、それとも新しい発想を生み出すのか楽しみです。



1975年の体育祭プログラム



高校3年生の集合写真

## 「認められる経験」が 支える主体性 ～大塚祭～

附属大塚特別支援学校 主幹教諭 中村 晋



11月に行われる大塚祭では、幼稚部から高等部までの幼児児童生徒全員がステージ発表を行います。そこでは大勢の観客を前に伸び伸びと表現する姿や、緊張感をもちながらも精一杯自分の力を発揮しようとする姿が見られます。知的障害のある子どもたちにとって「発表する経験」は、同時に「認められる経験」の場でもあります。主体的にある「コト(活動)」に向かうには、自分自身の興味・関心に基づく動機だけではなく、周囲の期待や励ましに応え、褒めてもらいたいという動機に支えられます。本校の子どもたちは、そうした他者からの「認められる経験」の積み重ねによって主体性を育てています。さらには様々な関係に支えられながら失敗や困難なことにも向き合い、チャレンジしようとする気持ちを身につけています。







## 運動会 ～紅組、白組、青組に分かれて～

附属久里浜特別支援学校 教諭 竹崎信也



くりはま体操

本校は、幼稚部と小学部を設置しており、合同で運動会を開催しています。10月20日(土)に本校の運動場にて、第15回運動会を行いました。当日はお天気にも恵まれ、子供たちは家族や地域の人々、関係者の方々に見守られながら、日頃の学習の成果を存分に発揮しました。

開会式では、5・6年生が演奏する入場行進曲「勇気りんりん」に合わせて全員入場しました。本校オリジナルの体操「くりはま体操」を年長の子供たちがみんなの前で行い、全員で楽しく体操しました。今年度は、紅組(年少、3・5年生) 白組(年中、2・4年生) 青組(年長、1・6年生)の3つのチームに分かれ、団体種目の「玉入れ」と「小学部かけっこ」では、順位に点数を付けて行いました。1位を目指して、籠に向かって玉を投げたり、ゴールまで走ったりするなど、最後まで全力で取り組みました。応援やダンスもそ

れぞれのチームに分かれて行いました。また、5年生が図画工作で制作した大きくて立派な入退場門が運動会の雰囲気をより一層盛り上げてくれました。閉会式では、オリンピックの表彰と同じ形式で、表彰台を使って1位のチームに優勝トロフィーと金メダル、2位と3位のチームにもそれぞれ、銀メダル、銅メダルが授与されました。今年度の優勝は青組でした。のびのびと体を動かす姿、楽しそうに運動に取り組む姿、優勝して喜んだり、負けて悔しがったりするなど、とても生き生きとした姿がたくさん見られた運動会となりました。

表彰式



3・4年生種目



## 手作りの交流を重ねて

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志



2018年10月15日に、本校を会場として附属中学との交歓会が行われました。附属中学からの参加者は32名でした。在籍者からすると少ないように思われるかもしれませんが、本校の中学部1～3年の生徒数に揃える形で参加希望を募っているため、毎年このような規模で行われています。これには、一人一人が交流出来る時間を十分確保するというねらいもあります。

附属中学の実行委員会と本校の生徒会の役員は、2回の話し合いで内容を決め、今年は「フリートーク」の他、「ブラックボックス」、「何の匂い」、「イントロクイズ」、「ポーリン

グ」を通して交流を深めました。終了後は、合同で反省会を開き、そこで出た反省を2月に行われる「ミニ交歓会」に活かすというサイクルが出来ています。この交歓会が始まってから20年ほどになります。その時々が生徒たちが工夫を重ねながら、積み重ねてきたのと同時に、お互いがより良い交流会にしようという意思を持っていたからこそ続けられたのだと思います。

一時期途絶えていた附属高校と本校高等部の交歓会を復活させてくれたのは、この交歓会を経験した両校の生徒たちでした。

これからも、両校の生徒の力で大きく育てて欲しい行事です。





## 附属小学校での教育実習

附属小学校 研修主任 山本良和



本年度の筑波大学附属小学校での教育実習も、例年同様に6、7月の3週間と10月下旬の1週間の2期に分けて行われた。教育実習を前後期に分けて行うシステムは、前期の成果を振り返るとともに、課題を活かして後期に取り組めるというよさがある。どの学生もしっかり準備をした上で最終週の教壇実習に臨むことができた。特に代表者による研究授業では、実習生同士が教育実習で学んだ互いの授業観を交流させて、初等教育の授業のあり方に関する考えを深めていた。

また、配属された1～5年の各学級では、朝8時から校庭で遊んだり、子どもと給食を食べたり掃除をしたりする中で、実際に小学生と接し、それぞれの発達段階の特徴及び個に応じた指導のあり方を肌で体験することができた。



## 平成30年度教育実習を実施

理療科教員養成施設 濱田 淳

理療科教員養成施設では、夏季休業が終わりしばらくすると、教育実習が始まります。平成30年度は附属視覚特別支援学校で、10月22日から12月3日まで行われました。理療科教員を目指す施設学生(実習生)にとって最も重要な過程の1つであり、それを支える附属視覚特別支援学校鍼灸手技療法科の教員にとっても重大な職務です。

約6週という期間で、現職教員の担当授業への参観、指導案作成、授業実習、研究授業と進んでいきます。視覚特別支援教育の実際を認識し、理療(視覚障害者が携わる職業の1つで、あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうの総称)の実情に即した内容を指導できるようにしていきます。指導案作成では、生徒観を重視し、各生徒の視機能や性格等に配慮した対応を練り、学級に対する授業内容に構成していきます。さらに、最終の研究授業では生徒の学習効率を高めるための創意工夫に富んだ実験的授業が実施されます。これは複数の実習生による共同作業になっています。よく考え付いたな、と思わせるような教具・教材の工夫や指導法が登場してきます。今回の研究授業でも、力作

が認められました。研究授業には、施設学生(1年次)も参観し1年後に備えます。実習期間最終日には、この研究授業に対する評価として、合評会があります。ここで



の評価は実習生にはとてもインパクトがあります(写真)。

これらの実習過程はかなり長い間行われてきましたが、実習生全体の視機能低下、学生の気質や資質等の変化を考えると、同じ内容で継続してよいのか、再検討の時期になっているのかもしれない。

この後、実習生は施設学生(2年次)に戻り、もう1つの重要課題である「卒業研究」の仕上げに入ります。この研究論文は、最終発表を経て、「理療科教員養成施設紀要」、他の専門学術雑誌等への投稿を目指し、各学生は文章に磨きをかけていきます。



## 中学生が語る「深い学び」 ～研究協議会全体会にて～

附属中学校 研究部  
関谷文宏

インタラクティブな学びを目指している附属中学校の研究協議会では、参加者との「協議」を重視し、中学生が語る学習の成果や課題をもとに「深い学び」を考えるという企画の全体会を実施しました。第1部「私を変えた一言」、第2部「～できる・よくできる・すごくよくできる～の違いから考える学習の深まり」、第3部「教科学習のコツや学習の充実感から考える深い学び」の3部構成で、主に1年生が発表し、参加者との質疑応答も発表者が行い、アドバイザーと板書の係を3年生がつとめ、教員は進行のみを担当しました。本年度130周年を迎え、「附属の中の附属」という意識の下、生徒も生き生きと取り組んでいました。





## 附属高校2学年シンガポール修学旅行

附属高等学校 2学年担任長 松下朝子

附属高校128回生は、11月19日から23日の日程でシンガポール修学旅行を実施しました。この修学旅行には、ふたつの大きな目的がありました。

ひとつは、現地ホワチョン校との交流です。2006年からヤングリーダーズサミットや相互短期留学の形で交流が続いていますが、学年行事は4回目です。事前に生徒同士がメールを通じて交流プログラムを練りました。オープニングセレモニーをはじめ、両校が数名ずつのグループに分かれての校内ツアー、ランチ、スポーツ・文化交流と続きました。ホワチョン生の明るく細やかなおもてなしに本校生徒も大きな刺激を受け、英語での会話も弾んで密度の濃い一日となりました。

もうひとつの目的は、本校の探求型学習「SGHスタディ」の一環としておこなうフィールドワークです。4月に3～6名の班で研究テーマを決めて、毎週土曜日に活動が続けてきました。

シンガポールでは班ごとに現地企業や各施設を訪問し、インタビューなど調査活動をおこないました。生徒達は、苦勞しながら訪問予約を取り、英語でなんとか意思疎通を図ろうと努力したようです。今後これまでの成果を論文にまとめることになります。

今回の修学旅行で、多民族国家シンガポールの異文化を体験し、より広い視野を持つことができましたように思います。今後の彼らの成長と飛躍を期待しています。

セレモニー中、ステージで大きな紙に8人で書いた書道パフォーマンス作品



訪問した医療機関でのインタビュー風景



広大なグラウンドでのサッカーやアルティメットのゲーム



文化交流の1つ百人一首。色のTシャツがホワチョン校生

## 第4回全国SGH校生徒成果発表会・第7回高校生国際ESDシンポジウムを開催

附属坂戸高等学校 農業科 建元喜寿



本年度も、平成30年11月8日(木)に「第4回全国SGH校生徒成果発表会」・「第7回高校生国際ESDシンポジウム」を筑波大学東京キャンパスで開催しました。

「高校生の、高校生による、高校生のためのシンポジウム」を大切にし、「オープンプラットフォームスクール」として、多くのステークホルダーが関わり、参加者が相互に学びあえる、高等学校のこれからの学びの在り方を常に意識した大会の運営を行っています。

さて、本年度も、国際連携協定を結んでいる、インドネシア、タイ、フィリピンから高校生を招聘しました。さらに、国立大学附属高校で農業科があり、同じ総合学科である愛媛大学附属高等学校の生徒の皆さんもはじめて参加され、愛媛でできたもち米

を持参していただき、そのもち米で海外からの招聘者の皆さんとお餅つきを体験しました。お餅つきの後は、生徒同士でアジア地域の今後の食糧生産の課題を語り合うなど、国際交流から探究活動まで、幅と深みのある活動となりました。「愛附」とは、国内姉妹校のように今後も交流を深めていく予定です。

SGHは、本年度で5年間の指定を終了します。しかし、これまでの活動で培った国内外のネットワークを発展させ、来年度以降、「筑坂」の国際教育活動を新たなステージへ発展させていきたいと思っています。





## 朝永振一郎記念 第13回 「科学の芽」賞表彰式・発表会開催

附属学校教育局 次長 濱本悟志

12月22日(土)、本学大学会館において、朝永振一郎記念第13回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校187校及び海外12か国14校(中国、大韓民国、タイ、ハンガリー、インド、イラン、イタリア共和国、マレーシア、ポーランド共和国、チェコ共和国、オランダ、オーストリア)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて2,853件の応募がありました。その中から小学生部門10件、中学生部門8件、高校生部門2件の合計20件の作品(うち団体作品2件含む。)を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者21名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々が出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ清水諭副学長、木越英夫副学長、茂呂雄二副学長、金保安則副学長、佐藤忍副学長、阿部豊副学長、池田潤学長補佐長、齋藤一弥数理物質系長、松本宏生命環境系長及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名程の出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である濱本悟志附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われました。発表会では、受賞者達がスクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしたりしていました。

最後に「科学の芽」賞実行委員会委員長の茂呂副学長の総評があり、その後、同会館の2階多目的ホールにおいて懇談を催しました。懇談では受賞者のご家族や、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。



### ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

**ポローニア**  
paulownia

vol.44

発行日……平成31(2019)年 2月28日

発行者……附属学校教育局教育長 茂呂雄二

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:UJimax[日本製紙]

